

ふるさと吉富町

私たちが暮らす「吉富町」には、現在に至るまでの数々の歴史があります。そして、そこには現在の快適な生活のベースがあります。そんなふるさと吉富町について、いろいろな視点からご紹介していきます。



山国川河口を望む

第27回 清き流れに育まれ -山国川-

恵みをもたらす川

福岡・大分県境を流れる山国川。英彦山の山腹野峠に源流をもつ延長56キロの一級河川です。古くは日本書記にて「御木川」と呼ばれており、その後も地域ごとに「高瀬川」「広津川」「小犬丸川」などの俗称がありました。明治8年に「山国川」と統一されました。山国川の美しい景観と豊かな水流は、流域に住む人々に有形無形の潤いをもたらしています。とりわけ水に関しては、水道用水としてはもちろん、農業用水・工業用水・発電用水と、実に様々な分野において恩恵を受けています。



満潮の山国川

苦心した川越え

さて、川幅が広い山国川は、対岸へ渡りたい人々にとっては難所でもありました。今でこそ頑丈な橋がいくつも架かっていますが、橋が無い時代には、川を渡る手段は「船渡し」でした。吉富町でも、小犬丸から中津市片端町へ行く「小犬丸渡し」と、広津から中津市外馬場へ行く「広津渡し」の2つの渡しがあったそうです。干満の差が激しいため、河口に位置する吉富町では満潮の時しか船を運行できなかったともいわれています。その後明治期に入り、小船を並べて綱でつなぎ板を敷いた「船橋」がで



現在の広津渡し

きましたが、大水の時に流失するなど不便であったため、明治37年、初代「山国橋」が完成しました。この橋は、煉瓦の橋脚部分以外は全て木材で作られていたそうです。その後、昭和9年には今の山国橋が完成し、80年以上経った今でも堂々たる姿で県境の交通の要所を支えています。



初代山国橋

自然の脅威との共生

山国川が現在の姿になったのは、明治22年。もともと、現在の本流は「裏川」と呼ばれる支流で、本流は中津市小祝の東側（今の「中津川」）の方でしたが、この年の長雨の影響で川の流れが変わり、現在の姿になりました。その後、明治29年にはこの本流が福岡・大分県境となりました。この年には、東吉富村に高浜村が編入され、現在の吉富町の姿となっています。その後、昭和19年の台風では町内で死者が出るほどの大氾濫を引き起こし、これを機に山国川の砂防・護岸計画が進むこととなりました。

私たちの生活と切っても切り離せない山国川は、そのもたらす脅威も、そして恩恵も、とても大きなものなのです。



山国橋上より見たる秋川の瀆

昭和30年発行の町誌より